

〔考察と結論〕 P-450_{ald}と P-450_{i1β} の免疫染色は副腎皮質組織におけるアルドステロン産生系とコルチゾル産生系の鑑別に有用である。

13. 14年間に経験した甲状腺濾胞癌84例の臨床病理学的特徴

(内分泌外科, *病院病理科)

山下共行・和田祐和・山崎喜代美・
飯原雅季・小原孝男・河上牧夫*

甲状腺濾胞癌は遠隔転移を起こしやすいが、診断は困難で治療法の選択に迷うことが多い。遠隔転移を起こしやすい濾胞癌の病理学的特徴を検討した。

〔対象〕 14年間に治療した濾胞癌84例。

〔結果〕 84例中31例 (37%) に遠隔転移を認め、うち8例 (9%) が原病死した。肉眼浸潤形態上、広汎浸潤型25例中13例 (52%) に転移がみられた。被包型53例中転移は14例 (26%) であったが、被膜の厚さで分けると厚いものに転移が多かった (40%)。低分化癌は22例で、そのうち73%に転移があり、23%が原病死した。

〔結語〕 遠移を起こしやすい濾胞癌は、広汎浸潤型、低分化癌で、これらに対しては甲状腺全摘と術後¹³¹I全身シンチを選択すべきである。

14. アルコール性肝障害における肝細胞癌合併の臨床病理学的検討

(消化器内科) 谷合麻紀子・橋本悦子・

野口三四朗・石黒典子・林 直諒

アルコール性肝障害 (ALD) 単独で肝細胞癌 (HCC) を合併した症例について非癌肝の病理組織を中心に検討した。対象は過去6年間に HCC と診断された578例中、HBs 抗原、HBV-DNA、HCV 抗体、HCV-RNA の全てが陰性で肝炎ウイルスの関与が否定され、非癌

部肝組織の得られた18例 (HCC 診断時平均年齢60~70歳、男女比17:1) である。非癌肝の組織診断はアルコール性肝炎2例、アルコール性肝線維症6例、肝硬変10例と肝線維症と肝硬変が多かった。ALD に特徴的な組織所見の出現頻度は、脂肪化60%、pericellular fibrosis 77%、perivenular fibrosis 72%、好中球浸潤60%、ballooning 33%、Mallory 小体33%、鉄沈着28%と「アルコール性」単独として矛盾しない所見であった。また、HCC は単発例が多く、分化度では中分化型が多かった。

15. 増殖組織における DTA 分化

(病院病理科) 河上牧夫・古田幸代・

桜田 実・関根延穂・金室俊子・

長谷川業嗣・伊藤隆雄・野並裕司

腫瘍の組織分類は診断医の間、また施設間で少なからず齟齬を来す場合が少なくない。そこで乳腺、甲状腺、肺、消化管の腫瘍性増殖病変の増殖パターンの解析を通して新たな類位 (taxon) を求めた。

粘膜表面のみならず、管上皮面に対して取る細胞増殖の態度、増殖ファミリー、管伸展性、先端増葉力の観点から分類を試みると原則として表面増大性の外向型 (D)、管進展型 (T)、増葉型 (A)、離上皮型 (E) の基本四型が区別される。これらの分節分化は系統発生における細胞の自己組織化の列序性を反映し、D型は古く、かつ組織液親和性 (lymphaffinity) が高いのに比し、A型は血管発生後のため血液親和性 (hemoaffinity) が高い。かつ血管との酸素分圧勾配上の細胞分化の観点からも展開すると機能動態をよりの確に表現することが可能となる。即ち増殖形態は本来的に D-T-A-E-cluster 形成性であり、腫瘍組織は所詮その defective な表現形態に外ならない。